

する約二万二、〇〇〇畝の支線水路がある。

計画受益面積 三、六〇〇畝

水田 幸野溝水路がかり 一、二〇〇畝
百太郎溝水路がかり 一、四〇〇畝
小計 二、六〇〇畝
畑地 幸野溝新設水路がかり 一、〇〇〇畝
かんがい排水事業 九億六、四〇〇万円
総事業費 六億五、七五〇万円

開拓地改良事業 一億六、〇三〇万円
代行開墾建設事業 八、八六〇万円
生産効果 二九九万九、〇〇〇畝

基盤整備で所得増大

― 県営中球磨地区圃場整備事業 ―

本地区は、目下施工中の県営球磨南部地区土地改良事業の受益地に包含されるが、耕地の状態は、約二五〇〜三〇〇年前に造成された当時のままである。耕地一筆当り面積は平均三町の不整形小区画で、且つ一戸当りの耕作団地数は平均七団地となっている。また、用水路及び排水路はその殆んどが用排水兼用の迂余曲折した土水路であり、加えて農道は非常に狭小で、踏み立て道、畦畔利用といった状態である。

従って、これらの基礎地盤では、これまでの零細な農業経営から脱皮し、農業経営の機械化、近代化による生産性の向

上を図るには程遠いものがある。

そこで、農業の機械化に対応するため、耕地の形状を長辺一〇〇畝、短辺三〇畝の平均三町区画にし、それぞれの区画に用水路と排水路を完備する。また、農道は幹線道路（六畝）支線道路（四〜五畝）として土地基盤の整備を行ない、同時に従来までの一戸当り耕作団地数の平均七団地を二〜三団地に換地集団化を図る。この基盤整備による農業の機械化及び近代化により、農作業の労力節減及び余剰労力により多角経営を行ない農家所得の増大を図るものである。

なお、本事業は昭和四十二年より昭和四十三年度の三カ年かけて総事業費二億七、〇〇〇万円をもって実施される中球磨五カ町村構造改善事業と総合的、有機的に結び付けて、本地域の農業構造を改善し、従来までの稲作一辺倒の農業経営から稲作、酪農、養蚕、栗、肉用牛等それぞれを組合せた複合経営を行ない、現在の一戸当り農家所得平均四〇万円を五〇万円に増大させるものとする。

事業計画は昭和四十一年度に総受益面積二、二二二畝、総事業費二億二、四〇〇万円の全体計画の承認をうると共に、受益面積六四一畝、事業費五億八、五〇〇万円を一期工事として分割実施の採択を得、昭和四十一年度（受益面積六五・八八畝、事業費六、六五〇万円）より約八カ年の計画をもって事業に着手している。

（耕地一課）

球磨の養蚕

南九州養蚕のモデル地帯をめざす



熊本県の養蚕は、現在産量およそ三、八〇〇トン。それは生産高において全国第七位であり、九州の総生産高の六〇％を占めている。過去一〇カ年の発展経過を辿ってみれば、繭生産量において一九％、一〇ア当たり収繭量において一二七％と、それぞれ全国平均の一〇三％、一一四・五％をはるかに突破して今日に至っている。

養蚕の主産地域と目される関東、東山地帯が伸び悩みの状態にあるとき、温暖な気候風土、豊かな土地資源に恵まれた、南九州地域は、旺盛な絹需要に対する全国的原料供給の将来における主流の基地として、大幅な飛躍成長が期待されている。そして、中でも本県蚕糸業の成長は九州養蚕の中核的、指導的存在として極めて重要な意義をもつものである。

養蚕経営の改善

豊かな県民生活への道しるべとして、さきに公表せられた「県計画」においては、最終目標昭和五十年に桑園面積七、〇〇〇畝、繭生産量九、一〇〇トンであ

（前頁よりつづく）

る問題のいっははしりである。なかでも、公共的な生活環境施設の整備を、いかに効率的にすすめる、平均的な行政水準を維持していくかが問題であり、過疎地域における集積部落の育成など、キメのこまかな施策が要請されている。次に、球磨地区におけるもう一つの大きな問題は、球磨川水系の防災である。

球磨地方は、昭和三十八年から、三年連続して水害に見舞われ、特に四十年七月の集中豪雨は、従来の計画洪水流量をはるかに上回る洪水を記録し、大水害となった。このため、まったく新たな計画洪水流量に基づいて、支流川辺川の藤田地点にダムを建設し、洪水調節を行なう球磨川・川辺川水系防災計画が検討中であり、球磨川上流の河川改修事業や各種の治山、砂防事業と合わせて、総合的な防災対策の確立が望まれている。

（企画部）

いつでも
いつでも

交通安全！

最近3カ年の球磨地方水害の被害状況

区分	月日	球磨地区被被害額	被害内容
38年8月豪雨	8.17(台風期)	4,096,485	集中豪雨により五木方面に山津波が発生。床上浸水415戸。死者不明13人、家屋の全壊流失12戸、床上浸水557(うち人吉483)戸。
39年8月台風	8.24(台風期)	578,266	台風14号により五木方面に大水害。死者2名、家屋の全壊流失74戸、床上浸水2,269(うち人吉1,896)戸。
40年7月豪雨	7.3(梅雨期)	6,011,683	集中豪雨による大洪水。死者2名、家屋の全壊流失74戸、床上浸水2,269(うち人吉1,896)戸。

注) 38年は「熊本県災害誌」、39年は「災害の記録」、40年は県球磨事務所調べ

り、繭の販売高で現在の繭価水準から推計すれば、およそ八億二億に達する見込である。

生産基盤拡大の方法としては、第一に土地資源の高度活用を図るうえからも、未墾地、開拓地を含む山麓地帯、畑作低位生産地帯を重点におき、大規模集団桑園の造成を進め、養蚕の集団導入、戸当り一畝以上の大型養蚕経営育成を基本とした新興養蚕地帯の造成に力を注いでいる。

一方、菊池川、緑川流域を中心とした既成養蚕地帯においては、桑園経営規模の拡大により、副業的色彩から、複合経営への完全脱皮をはかり、「養蚕+α」の類型で自立経営の生産基盤のうえに立った、土地労働生産性において極めて、能率の高い高収益養蚕の運用である。

大型專業養蚕へ

△人吉市大野開拓地▽

昭和三十年頃から、国内外の生糸不況で不振のドーン底にあった養蚕業も、昭和三十四年春蚕期を境に、再び上向きになった。加えて三十六年にスタートした農業構造改善事業と相まって、桑園面積の拡張、産繭額の増加は、着実な上昇線をたどってきている。特に、球磨郡は、開拓地を中心とした、新植桑園の増加が目立っているのだが、人吉市の大野開拓地、大畑開拓地など、全くの素人養蚕家たちが、大規模集団桑園を完成させ、確かな経営を獲得しているのは、球磨郡山麓部、あるいは、開拓地域の今後の方向を示しているようである。

例えば大野開拓地の高城しずさんは、昭和二十

養蚕の基幹従事者一人当り、繭生産量六〇〇から七〇〇銖——夫婦二人を経営単位とすれば、楽に桑園一畝以上の桑園を管理して、年間一〇〇万円から一三〇万円の生産を確実に得られる経営である。

これは現在の技術水準をもって、県下ですぐに実現的な幾多の事例を生み、やれば必ず到達出来る目標であることを訴えている。

幸いにして、現在高効率技術に最も乗り遅れのない養蚕専用の各種作業機械が急速に開発されつつあり、動力による高速運転の溝掘り、撒布機、条桑収穫機、自動給桑装置、脱繭機等々……すでに実用化されたのも数多くあり、養蚕技術革新の原動力となりつつあることは、まことに心強い限りである。

五年計画を二応達成したい。桑園一三〇アール、収繭量一、〇〇〇キロで収入も百万円を突破した。宮城さんの場合、①桑園規模拡大②施設、資材の充実③年間桑葉の専用採集の完成④自然上籐の導入⑤養蚕技術の早期修得の五つの目標を立て、これをひとつひとつ着実に解決していったことに注目したい。

球磨養蚕指導所も、大規模養蚕農家の健全育成という大テーマをめざして、反当収量の増加、土壌改良、省力化および協業化を懸命に推し進めている。

よこがお